



テレビが誕生し
成長していく
最もエネルギーギッシュな時代に

私の放送人生

第8回

元北海道放送(HBC)
長沼 修氏

テレビ塔が建った

1957年、北海道でも民間のテレビ放送が始まった。私はまだ中学3年生。学校の窓から見える手稲山(ていねやま)の山頂に真新しいテレビ塔が建った。誰の家にもまだテレビはなかった。町の電気屋に1台。相撲の時間には人だかりがして、大人たちの肩越しに未知なる白黒の世界を垣間見た。担任の先生が言った。「テレビ塔を見に行こう」。

日曜日、10名ほどの生徒が学校に集まり、10キロの道を自転車をこいで手稲山の登山口に向



中3の頃、HBC手稲山頂送信所の前で

かい、そこから11キロの山道を歩いてようやく1023mの山頂にたどり着いた。そこには、天に向かつて突き刺さるように建つテレビの鉄塔がきらきらと輝いていた。

新しい時代が来る……。子供心に胸が高まったのを覚えている。

そして1967年、私は大学を卒業するとき、就職先に北海道放送(HBC)を選んだ。

大学ではオーケストラ部に所属し、音楽に打ち込んでいたのだが、演奏会のたびに招待券を送っているにもかかわらず、当日券を買って聴いてくれたのがHBC

の初代社長阿部謙夫さんだった。1000mを超える高い山の上に世界で初めてテレビ塔の建設を発案したのも、もとは土木技術者だった阿部社長の英断であったと後で知るのが、私は、いつも学生の音楽会を聴きに來てくれる尊敬する阿部社長の会社で働きたいと、HBCを受験したのだった。

運よく合格し、報道を希望したのだが、新しい情報番組を始めるということで制作部の配属



入社当時の筆者

になった。地方局の制作部員は何でもやる。情報番組から音楽番組、炭鉱事故などの緊急取材の応援やドキュメンタリーも作った。そして当時、HBCが最も力を入れていたのがテレビドラマの制作だった。

HBCのドラマ制作の歴史はラジオ時代にさかのぼる。1951年にラジオ放送を始めた時にはとにかくNHKに負けない良質の番組を作るということが目標だった。のちに大家となる安倍公房、谷川俊太郎、岩間芳樹、間宮芳生ら、今思えば錚々たる芸術家の卵たちがHBCのラジオに参加しているいろいろな試みをしていった時代。その伝統をHBCのテレビも引き継いだ。部員は皆、芸術祭で賞をとることを競った。

1961年にはオール・フィルム作品のドラマ「オロロン島」が芸

術祭で文部大臣賞をとった。この時、助監督を務めていたのが私の師匠である守分寿男(もりわけ・としお)さん。守分さんたちは「良い番組を作ることによって局の評価は高まり、結果、広告収入も増えるのだ」という信念で、ひたすら良質のドラマづくりに力を注いだ。初代阿部社長は社是に「良い番組を作り地域文化に貢献することこそ地方放送局の使命だ」と説いた。

ドラマの現場で

HBCのドラマの特徴はロケの多用。それまでフィルムで撮影されていたドラマのロケを、画質のきれいなビデオ・カメラで撮影した。そのため、大きく高価なスタジオ・カメラを屋外に持ち出した。ただ、このカメラは重く、4人がかりで運ばねばならなかったし、ケーブルも直径3センチほどの太いもので、これらを操る技術者は大変だった。

私が入社した時に制作していた東芝日曜劇場「わかれ」(67年)の一場面。積丹半島の突端の岩の上で、主人公の男と一人の少

女が踊っている。背景に大きな太陽が沈んでいき、その中に主人公と少女のシルエットが浮かび上がるという絵コンテだ。まず、太陽は水平線のどこに沈むか。そして、岩礁の上の少女と、刻々と沈んでいく太陽を結ぶ直線の延長線上に設置されるカメラの位置はどこか。何ミリのレンズで撮影する必要があるか。太陽の沈む位置は毎日少しずつ移動するから、太陽と、中間の岩の上の少女を結ぶラインの延長線上におかれた望遠レンズのカメラは、レールに乗せられ、太陽の動き



東芝日曜劇場『わかれ』(67年)

に合わせて動かさねばならない。その動きが速いのだ。何日にもわたってテストが繰り返され、ついに本番。技術陣は、海に沈む太陽の中で踊る少女の姿をしつかりととらえていた。HBCのスタッフが総力を結集して収録したこの太陽の映像が放送されたのはたったの5秒。しかし、このドラマにとつては大切な5秒だということとを新入社員の私は心に刻んだ。

初めてドラマのAD(助監督)に入ったのは入社3年目、当時HBCは年に4本から6本の日曜劇場を作り、日曜夜9時のゴールデン・タイムで全国放送していた。当時の日曜劇場は、TBSがほぼ6割を作り、残りをABC(のちにMBS)、CBC、RKB、HBCの系列基幹局が交代で制作していた。TBSは、名プロデューサーの石井ふく子さんが「女と味噌汁」など高視聴率のシリーズをたくさん作ってくれていたもので、地方局は視聴率をあまり意識せず、内容本位で、地方に生きる人々の喜怒哀楽をドラマにしていた。特にHBCのドラマは芸

術志向が強く、また、実験的な試みも盛んに行っていた。

そんなドラマ班に入り、怖い先輩の下でのADの仕事は大変だった。HBCのドラマはいつも自然が相手。それが大変さに輪をかけた。例えば流水の中でのロケ。網走の海は2月には一面に凍る。主人公の池内淳子さんがその氷の割れ目に落ちるという設定のロケ。もちろん氷の割れ目に飛び込むのは代役で、地元の漁師さんに頼んでいた。下見の時に比較的 안전한場所を選んでいたのだが、数日後の撮影の日は様子が一变。巨大な氷の塊が海岸に押し寄せ、とても危険な状態になっていた。かつらをかぶり女装して海に飛び込んでくれることになっていた地元の漁師さんは「氷の下は潮の流れが速い、とても危険なのでできない」といつて帰ってしまった。さあ、どうしよう。それを何とかするのがADの仕事。冬の湖で水上スキーをするという知人の女性に連絡して、急ぎ網走に来てもらい、詳しくは説明せず、腰にロープを結んで氷の割れ目に飛び込んでもら



日曜劇場『ばんえい』(73年)

った。今考えるととても許されない危険な撮影だったが、先輩監督の命令は何としても達成しなければならぬのがテレビの現場だった。

その後、私に無理難題を押し付けていた師匠の守分先輩は、売り出し中の脚本家、倉本聰さんと知り合い、立て続けに素晴らしい作品を何本も撮った。私はそれらの作品のほとんどにADとしてついた。倉本さんはその頃から一切の妥協を許さない頑固な人だった。守分さんもさらに輪をかけて理想の絵づくりにこだわった。二人からの指示は大

変だったが、どんな難題もその必然性が納得できたので、私は懸命に取り組んだ。

例えば、「ばんえい」(73年)。ドラマのクライマックスで、巨大な白馬が草原をまっしぐらに走ってくるという幻想的なイメージ映像がどうしても必要だった。どうやって裸馬をカメラに向かって真つすぐ走らせるのか。1トンはある巨大な白馬を帯広のばんえい競馬場から借りてくるところからADの仕事は始まる。そして、小高い丘の草原の向こう側にその白馬を連れていき、200mほど離れて据えられたカメラに向かつてまっしぐらに疾走させなければならぬ。はたしてどうやってまっすぐ走らせるのか。馬の好物の燕麦(えんばく)やニンジンを用意したり、馬主に大声で呼んでもらったりするのだが、馬は一向に動かない。そこで考えたのがメス馬。発情期のメス馬を2頭、カメラの横につなぎ、鳴いてもらうことにしたのだが、馬はそう簡単には鳴いてくれない。そこで私の特技が役に立つ。私は馬の鳴き声が得意なのだ。メス

馬のそばで私が悩ましくいなくなくと、つられてメス馬が声高らかに呼応する。それを聞いていた丘の向こうの巨大な白馬が、土を蹴り上げて興奮しているとの無線連絡。「離せ!!」との私のかけ声で、綱を放たれた巨大な白馬は一直線に疾走し、丘を越えて緑の草原をカメラ

ラに向かつてまっしぐら。ドラマのクライマックスとなる素晴らしい映像が撮れた。この作品「ばんえい」はその年の芸術祭優秀賞を受賞した。

その他、日本初の小型ビデオ・カメラによるオール・ロケ作品で女優優、田中絹代さんがテレビに初主演した「りんりんと」(74年)や、やはり田中絹代さんと笠智衆さんが、昔住んだカ

ラフトの町の地図を作って歩く老夫婦を演じた「幻の町」(76年)など、いまでも語り継がれる作品にADとして参加できたことは幸運だった。

私が最初に演出をした作品は「聖夜」(73年)。当時人気の小倉一郎さんと仁科明子さんの



初めて演出した『聖夜』(73年)で、小倉一郎さん(右)と



かつてさんざん搾り上げられた倉本聰さん(右)と

主演で、脚本は倉本聰さん。私はまだ29歳だった。倉本さんは、その翌年にはNHKと大喧嘩して大河ドラマを途中降板するほどの怖いライターとして有名だったが、新人の私のために脚本を書いてくれた。ただ、その脚本の解釈をめぐり、さんざん搾り上げられた。赤坂のTBS地下の喫

茶店TOPSで何時間もシナリオの解釈について尋問され、その答えの曖昧さを鋭く追求された。このころから倉本さんは、脇役を含めてすべての登場人物の背景について、両親、祖父母、さらに曾祖母の3代にさかのぼって考えよ、というのが持論だった。私はドラマの初演出で5キロやせ

たが、このドラマは好評で未だに話題にしてくれる人もいる。その後、倉本さんには10本ほどの作品を書いていただいた。中でもドボルザークの交響曲「新世界」の4楽章に、たつた一発だけ鳴るシンバルをたたき損ねた男(フランキー堺)の悲哀を描い

た「ああ!新世界」(75年)。そして、HBCでの倉本作品の集大成となる「ホンカンシリーズ」(75〜82年)で私は5作目、6作目の演出を担当し、北海道での視聴率は39%にもなった。

その他、たくさんさんの脚本家や俳優ともドラマを作った。特に脚本家・市川森一さんとは思い出に残る

作品が多い。水谷豊さんがジャンプ台から飛び降りる「バースデイ・カード」(77年)は、深町純さんの音楽も印象的で話題となった。また、開放されたばかりのサハリンを舞台にした「サハリンの薔薇」(91年)は、役所広司さんとロシアの女の子がチェーホフの芝居の台詞を媒介して会話し、



役所広司さん(中)主演『サハリンの薔薇』(91年)は芸術作品賞を受賞

ドラマが進むという難しい作りだったが、役所さんの好演もあって芸術作品賞を受賞した。金子成人(なりと)さんとも、たくさんドラマを作った。佐藤B作さんと市毛良枝さん夫婦が演ずる「カラス係長シリーズ」(89〜92年)は特に思い出に残る作品だ。HBCのドラマ制作は約200

本あるが、そのうち100本ほどの作品にAD、演出、プロデューサーなどとしてかかわったことになる。

何でもやる

地方局のディレクター

私は学生時代に音楽をやっていたので楽譜が読めたから、その点では貴重だったようだ。当時の先輩はストップ・ウォッチをにらみながらカット割りをしていたのに、私はスコアにカット割りを直接書いた。そんなわけで、当時人気だった「ロッテ歌のアルバム」など全国中継の音楽番組もたくさん作った。その関係で、当時紅白歌合戦と対抗して絶大な人気があったレコード大賞の審査員も担当した。また、札幌公演を行った世界的な歌手ステイビー・ワンのダーのプロモーション・ビデオを撮ったこともある。懐かしい思い出だ。

たくさんの中継番組も手掛けたが、今でも背筋が凍るのが1976年の「ゆく年くる年」。その頃、暮れのNHK「紅白歌合戦」に続いて放送される「ゆく年く

る年」も高視聴率で、民放は何をしてもかなわなかった。そこで何とかしたいと「民放版ゆく年くる年」が企画された。すなわち民放全系列が束になり、全国の全民放が同じ番組を放送するというもの。この年はTBS系列の担当で、HBCは午前0時に千歳空港に近い美々(びび)という小さな駅を通過する列車の中から、間もなく定年を迎える駅長さんに花束を投げプルゼントするというもの。疾走する列車からの生中継は難しかった。列車の中と外にカメラとパラボラ送信機を用意し、何度もしハーサルを繰り返した。

しかし本番直前、この列車に爆弾を仕掛けた、という電話が札幌駅に入った。この年の春には北海道庁のロビーで爆弾事件があり、80名以上の死傷者が出ていた。電話の信憑性

は十分にあった。前代未聞の全国87局ネット番組のクライマックス、午前0時を担当するディレクターとして、この急場をどのようにして乗り切るか。列車は来るのか来ないのか。来ない場合はどうするのか。キー局のスタジオと怒号が飛び交い、髪の毛が逆立った。そして結局、列車は来ず、何とか駅長のインタビューで取り繕ったが、このとき抜けた頭の毛

はその後も回復していない。

番組の制作者として最も忘れ得ぬ番組は、音楽ドキュメンタリーの「童は見たり」世界最大のヒット曲『野ばら』の謎を追う(87年)だ。ゲーテの「野ばら」の詩に、異なる154ものメロディがあるとの説を追いかけて、3年がかりでヨーロッパをくまなく取材した。シューベルトの「野ばら」やウエルナーの「野ばら」は有名



番組制作者として最も忘れ得ぬ番組『童は見たり』(87年)

だが、ブラームスやシューマンやベートーベンの未完成の「野ばら」もあった。なぜ、こんなにもたくさんさんの「野ばら」が産まれたのか。そこには民族間の争いや人間愛など、人々の夢と苦しみの歴史が潜んでいた。この企画は製作費を使いすぎて私は辞表をしたためたが、芸術作品賞を受賞して無罪放免となった。バブル真つ盛りという時代ではあったが、音楽好きの私には夢のような番組作りだった。

突然の社長就任

1995年6月。さあこれからどんな番組を創ろうかと考えているときに、突然、辞令が出た。「社長室経営企画部長を命ず」何をする部署かもよくわからなかった。膨大な番組の企画書や取材の資料をダンボール箱に詰めて倉庫に移し、社長室に移動した。経営企画部長の仕事は役員会の資料をそろえ、進行をし、議事録を作成すること。その議事録を社長や専務に見せ、修正があれば直すこと。それと大事な仕事は社長の挨拶の原稿を書

くこと。特に創立記念日とお正月の挨拶は経営方針を含めて30分ほどの演説をするので、その原稿を書くのは大変だった。もちろん修正が何度も入り、次第に社長のものの考え方が分かるようになってきた。

そして、もう一つの大きな仕事は、老朽化した社屋の建て替え計画だった。当時の社屋は最新の耐震基準を満たしていないため、大きな地震には耐えられないという危惧があった。もちろん専門の部署も作り、

委員会などでも議論していたが、将来の放送がどの方向に行くのか見極めることが重要だった。いろいろな方の意見を聞き、様々なシンポジウムなどに出て専門家の意見を参考にした。

それと同時に持ち上がったのが放送のデジタル化への対応だった。これからの社会はITの時代。放送のデジタル化は避けられないということだった。しかし、そのためには新しい送信機を全道160か所に設置しな

ければならない。しかも場所によつては鉄塔の新設も必要だった。これには100億に近い資金が必要で、売り上げが低迷する地方局には大変な負担だった。

1997年秋、私はTBSのデジタル視察団に加わり、2週間ほどアメリカのデジタル事情を見て回った。新しい機械がどんどん入っていて、アメリカ・オンライン(AOL)など放送と通信の融合が進んでいるのに愕然とした。

もつと驚いたのが地方放送局の社屋だ。ほとんどがダウンタウンから離れた郊外の、交通の便利などところがあり、建物は平屋建てで簡素、しかし中には最新のデジタル機器がびっしり詰まっていた。キャンディ工場のお古を社屋にしている局もあった。

帰国してすぐ社屋建設の会議に出た。社長が私に「アメリカの印象を話せ」と言った。会議には設計会社の人やゼネコンの人も



TBSデジタル視察団でアメリカへ

いた。会議室の真ん中には、すでに建築を予定されていた新社屋のプラスチックの模型まで飾ってあった。そこで私はアメリカで感じたことを率直に話した。「放送業では立派な社屋はお金を生ままないのではないか」と。

そして99年の6月、社長室長だった私は突然、常務取締役を命ぜられた。さらに10か月後の2000年4月、私はまたも突然に代表取締役社長に就任することになった。そして、先代社長が重い病であることを打ち明けられた。私は56歳。ほとんどの役員が私より年上だった。

私が真つ先に行ったのは社屋建設の白紙化。目の前に迫るデジタル化に加えて、バブルの崩壊による景気の低迷など、良い材料はなかった。とにかく社屋は我慢してデジタル化に集中しよう。広大な北海道のデジタル化は、民放5局が協力しなければ成しえない。北海道で一番古い局として、道内放送局のまとめ役を負わされ、民放連のデジタル特別委員などを長く勤めながら放送のデジタル化に邁進した。

ところが、ようやく道内各局が力を合わせてデジタル化を何と乗り切ったところで、リーマン・ショックが起きて売り上げが激減した。視聴率も悪かった。社員のボーナスを半分にしなければならぬとの進言を受け、2009年、私は社長の退任を決意した。その後、会長を1年務めた後、請われて札幌ドームの社長に就いた。

札幌ドームは、野球ばかりではなくサッカーやラグビー、また、たくさんコンサートの展示会などが開催される、まさに雪国ならではのエンターテインメント空間だった。そういう意味では放送でやってきたことの延長でもあった。

そんな時に、それまでの無理がたたったのか、札幌駅の地下街で突然心臓が止まった。ちょうど後ろを歩いていた看護師さんに心臓マッサージをしてもらい一命をとりとめた。心臓の停止時間15分。意識が戻ったのは24時間後だった。その看護師さんは心臓の専門家で完全なマッサージを施してくれたのだ。まさに

奇跡的だった。

何が私を救ってくれたのか。もう少し世の中のために尽くせということか。

今、北海道民放クラブをはじめ、たくさんボランティアを引き受けて毎日が忙しい。倉本聰さんとの付き合いも続いており、一昨年にはHBCの70周年企画番組の収録で、映画の是枝裕和監督と倉本聰さんのビッグ対談に、富良野まで行つて立ち会った。

80歳を目前にして今、未だ捨てられずにいるたくさんの方の企画書の束を見ながら私の放送人生を振り返ると、テレビが誕生して成長していく最もエネルギーが豊富な時代に、多くのすぐれた先輩やたくさんの方の仲間たちと夢になつて仕事ができたと、心から幸せに思う。

また、様々な機会を与えてくれたキー局の皆さんや、互いに切磋琢磨した道内民放の仲間たちとも、今は想い出話をしながら楽しくお付き合いさせて頂いている。

地震が来るたびに心配してい

たHBCの社屋は、一昨年、先輩たちが残してくれた資産を活用し、後輩たちが建て替えてくれた。もう地震に怯えることはない。

長沼修略歴

1943年、札幌生まれ。67年北海道放送入社。以来、制作現場で音楽番組や情報番組などを担当。特にドラマは助監督、演出、プロデューサーとして関わり、100本以上の作品を北海道から全国に発信する。

芸術作品賞や民間放送連盟賞など受賞作品多数。

2000年北海道放送社長、2009年会長。

2010年札幌ドーム社長に就任し、2017年退任。

現在は北海道民放クラブ会長や北海道国際音楽交流協会理事長などボランティアに忙しい。

著書に『北のドラマづくり半世紀』(北海道新聞社)、『なんか変だな』(亜細亜社)